

**[A年] 公現後第3主日(2025年1月26日)**

**【旧約聖書日課】イザヤ書 8章23節b~9章3節**

8 <sup>23b</sup>先に

ゼブルンの地、ナフタリの地は辱めを受けたが  
後には、海沿いの道、ヨルダン川のかなた  
異邦人のガリラヤは、栄光を受ける。

9 <sup>1</sup>闇の中を歩む民は、大いなる光を見

死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。

2 あなたは深い喜びと

大きな楽しみをお与えになり

人々は御前に喜び祝った。

刈り入れの時を祝うように

戦利品を分け合って楽しむように。

3 彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を

あなたはミディアンの日のように

折ってくださった。

**【使徒書日課】**

**ローマの信徒への手紙 1章8~17節**

8まず初めに、イエス・キリストを通して、あなたがた一同についてわたしの神に感謝します。あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。9わたしは、御子の福音を宣べ伝えながら心から神に仕えています。その神が証ししてくださることですが、わたしは、祈るときにはいつもあなたがたのことを思い起こし、<sup>10</sup>何とかしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける機会があるように、願っています。<sup>11</sup>あなたがたにぜひ会いたいのは、“霊”の賜物をいくらかでも分け与えて、力になりたいからです。<sup>12</sup>あなたがたのところで、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、

励まし合いたいです。<sup>13</sup>兄弟たち、ぜひ知ってもらいたい。ほかの異邦人のところと同じく、あなたがたのところでも何か実りを得たいと望んで、何回もそちらに行こうと企てながら、今日まで妨げられているのです。<sup>14</sup>わたしは、ギリシア人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも、果たすべき責任があります。<sup>15</sup>それで、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を告げ知らせたいのです。

<sup>16</sup>わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。<sup>17</sup>福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

**【福音書日課】 マタイによる福音書 4章12~17節**

<sup>12</sup>イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。<sup>13</sup>そして、ナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まわれた。<sup>14</sup>それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。

<sup>15</sup>「ゼブルンの地とナフタリの地、  
海沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、  
異邦人のガリラヤ、

<sup>16</sup>暗闇に住む民は大きな光を見、

死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」

<sup>17</sup>そのときから、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた。

## 「聖書協会共同訳」（2018年版）読み比べ

## イザヤ書8章23節～9章3節

8<sup>23</sup>しかし、抑圧された地から闇は消える。

先に、ゼブルンの地とナフタリの地は  
辱められたが

後には、海沿いの道、ヨルダン川の向こう  
異邦人のガリラヤに栄光が与えられる。

9<sup>1</sup>闇の中を歩んでいた民は大いなる光を見た。

死の陰の地に住んでいた者たちの上に  
光が輝いた。

2 あなたはその国民を増やし

その喜びを大きくされた。

彼らはあなたの前に喜んだ。

収穫を喜ぶように

戦利品を分けて喜び踊るように。

3 彼らの負う軛、その肩の杖、虐げる者の鞭を

あなたがミデヤンの日のように

打ち砕いてくださった。

## ローマの信徒への手紙1章8～17節

8初めに、私は、イエス・キリストを通して、あなたがた一同について私の神に感謝します。あなたがたの信仰が世界中に語り伝えられているからです。9私が御子の福音を宣べ伝えながら心から仕えている神が証ししてくださることで、私は、あなたがたのことを絶えず思い起こし、10祈るときにはいつも、神の御心によって、あなたがたのところに行く道が開かれるようにと願っています。11あなたがたに会いたいと切に望むのは、霊の賜物をあなたがたに幾らかでも分け与えて、カづけたいからです。12というよりも、あなたがたのところでお互いに持っている信仰によって、共に励まし合いたいです。

13きょうだいたち、ぜひ知っておいてほしい。ほかの異邦人のところと同じく、あなたがたのところでも、何か実りを得たいと望んで、何度もそちらに行こうとしたのですが、今まで妨げられているのです。14私には、ギリシア人にも未開の人〔ニバルバロイ〕にも、知恵のある人にもない人にも、果たすべき責任があります。15それで、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を告げ知らせたいのです。

16私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力です。17神の義が、福音の内に、真実により信仰へと啓示されているからです〔別訳→揭示され、信仰から信仰へと至らせるからです〕。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

## マタイによる福音書4章12～17節

12イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。13そして、ナザレを去って、ゼブルンとナフタリとの地方〔別訳→塚〕にある湖畔〔直訳→海辺〕の町カファルナウムに来て住まれた。14こうして、預言者イザヤを通して言われていたことが実現したのである。

15「ゼブルンの地とナフタリの地

湖沿い〔直訳→海沿い〕の道、

ヨルダン川の向こう

異邦人のガリラヤ

16 闇の中に住む民は

大いなる光を見た。

死の地、死の影に住む人々に

光が昇った。」

17 その時から、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

- ・1月26日「公現後第3主日」の日課主題は「宣教の開始」。
- ・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、アッシリアによる北王国への侵攻を背景に、南王国存続の希望が告げられる預言の箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、冒頭挨拶に始まって最初の論考に入っていくための主題を提示するまでの箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、主イエスの宣教活動の始まりを伝える箇所。

**旧約日課(イザヤ8章より)**

- ・「イザヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第一に置かれた預言文書。前8世紀後半、南王国ユダで四代の王(ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤ)に仕えた宮廷預言者イザヤの預言句集と活動記録の集成として編纂された「預言者の書」が基礎となっている。ただし、40章以下は、その「預言者イザヤの預言の書」に付加する形で、前6世紀、バビロン捕囚からペルシア支配時代にかけて「預言者イザヤ」を模範とする祭司預言者集団によって告げられた預言句を集成したものと考えられている。
- ・日課箇所は、預言者イザヤが仕えた三人目の王アハズの時代、南王国ユダが生き残りをかけてアッシリアに朝貢を決める一方で、北王国イスラエルがアラム・ダマスコ王国に続いてアッシリアに滅ぼされていくという背景の中で告げられた預言句である。アッシリアでティグラト・ピレセル(在位=前744~727年頃)が王に即位して軍事行動を活発化させたとき、北王国イスラエルはイエフ王朝(前842~746年頃)が崩壊して混乱のただ中であつたが、地域の大国としてアラム・ダマスコ王国と同盟を組み、周辺諸国を巻き込んでアッシリアの軍事行動に対抗しようとしていた。南王国ユダのアハズ王は、それまでの北王国イスラエルとの従属関係にもかかわらず同国とアラム・ダマスコ王国の干渉を振り切ろうと目論み、アッシリアへの直接朝貢に打って出、アラムおよびイスラエルに対するアッシリアの軍事侵攻を呼び込んでいたのである(王下16章、イザヤ7章を参照。シリア・エフライム戦争)。これにより、南王国ではアハズ王の後継としてヒゼキヤ王が即位する見通しとなり、王国存亡の危機を脱して希望が告げられることになったと考えられる。
- ・日課箇所の「ゼブルンの地、ナフタリの地」、「海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤ」は、いずれも北王国イスラエルの版図に含まれてきた領域。アッシリアの侵攻が始まり、アラム・ダマスコ王国が滅ぼされたとき、北王国もまずこれらの領域の支配権を奪われたと考えられる。北王国は一時的にアッシリアに服従して朝貢したが、エジプトの後ろ盾で反旗を翻そうとした結果、サマリア王権はアッシリアによって滅ぼされることになった。

**使徒書日課(ローマ1章より)**

- ・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。パウロが未訪のローマ教会共同体に宛てて、自身の訪問計画を告げると共に、その後のエスパニア伝道計画への協力を求めるために記した書簡。日課箇所では、その第一の目的の意図するところが端的に告げられている。
- ・日課箇所では、パウロは自身のローマ行きがこれまで実現しなかった理由として、「妨げがあつた」ことに触れている。詳細についてパウロ自身は説明していないが、「使徒言行録」の伝えるパウロの活動経歴から推認すると、彼は、ローマを訪問する前に片づけておかなければならないトラブルを抱えていたと思われる。パウロは、コリント伝道(使徒18章)の後にエルサレムおよびシリア・アンティオキアで使徒らの教会を訪問することによってエフェソを活動拠点とすることが許されていたが、数年後にはその地での活動が事実上できなくなっている(使徒19~20章)。おそらく、エフェソを拠点とするようになっていた使徒(ヨハネ?)を支持する弟子たちとの間で、考えの相違などによる対立を招いていたのであろう。ヨハネの教会共同体(「ヨハネ福音書」や「ヨハネの手紙」を生みだした教会)は、「新ユダヤ伝統主義」に立っており、パウロ派との間に対立が生じていたのかもしれない。パウロは、かつてアンティオキア教会から派遣されるバルナバ宣教団から離脱した際も、「異邦人」問題で対立していたとされる。使徒らが「異邦人」の受け入れを初期には必ずしも喫緊の課題とせず、「ユダヤ人」としての「割礼」や「食物規定」を「異邦人」信者にも求めるという扱いが続いていたことに対して、パウロは疑義を唱え、「割礼」や「食物規定」などの「ユダヤ人化」を「異邦人」信者に求めることを一切否定したため、対立していた。この対立は、パウロが教会共同体内における徹底的な「非ユダヤ主義」の実践という無理な主張を取り下げ、現実的で調停的な「(ユダヤ人にも異邦人にも適用される)普遍的救済論」(「Iコリント」などで提示されている福音理解)に移行することによって解消し、これによって、パウロ派は使徒らの教会共同体ネットワークに留まることになった。しかし、「ヨハネの教会共同体」派との間でこの神学問題が再燃するに及んで、パウロは、その調停的な「普遍主義的救済論」をより厳密に、旧約聖書に典拠を持つ「福音」として提示する必要に迫られていたと考えられる。本書簡は、そのような背景で記され、「福音」理解が展開されている。
- ・日課箇所16節は、そのような事情の中で示そうとした「普遍主義的救済論」の端的な表現と言える。
- ・17節は、M.ルターらの宗教改革の議論の出発点ともされる句。この「神の義」を、法廷的な厳罰主義の発想で理解するか、あるいは、社会関係における自己言及的な発想で理解するかによって、救済論は正反対の方向性となる。後者の理解に立つのが、パウロの「福音」理解である。

## 福音書日課(マタイ4章より)

・日課箇所は、洗礼者ヨハネから洗礼を受けて「荒野の四十日」を過ごされた後に宣教活動を始められたとされる主イエスの、その始まりを伝える箇所。並行記事が「共観福音書」(マルコ、ルカ)に見られるが、「マタイ」は独自の詳細情報を加えると共に、他箇所にも見られるような「預言の実現」解釈を添えている。

・洗礼者ヨハネは、ユダヤ属州に含まれる「ユダヤの荒野野」(3:1)や「ヨルダン川」(3:6)で活動していたが、その地には行政権の及ばないガリラヤの領主ヘロデ・アンティパスに捕らえられたとされる(ルカ3:19~20)。そこで、「ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた」のは、主イエスが自分の身に危険が及ぶことを恐れたためだという理屈は成り立たない。「マタイ」は、領主ヘロデに捕らえられた洗礼者ヨハネの置かれたところ近くに主イエスが敢えて行かれた、ということを示唆しているのかもしれない。洗礼者ヨハネの弟子たちや追従者らが、捕えられた自分たちの師の近くに集結していたことは十分にあり得ることで、主イエスが敢えてそこに行き行って自身の活動を始め、自身を洗礼者ヨハネの後継者として示そうとされた、と「マタイ」は理解しているのかもしれない。実際、この箇所では伝えられる主イエスの宣教の言葉は、洗礼者ヨハネの宣教の言葉として伝えられる句と一致している(3:2、4:17)。

・「湖畔の町カファルナウム」は、「共観福音書」が共通して主イエスのガリラヤ宣教における拠点として伝えている町で、シモン・ペトロらの家もこの町にあったとされる。ここにはローマ軍団が駐屯しており、東方(パルティア王国など)を見据えて交易上も軍事上も要衝と位置づけられていたことが知られている。この町の所在を「ゼブルンとナフタリの地方にある」と表現するのは、「マタイ」が続いて「預言の実現」解釈でこれらの地方名を含む預言句を引用するためであって、1世紀当時、この地方が「ナフタリ」あるいは「ゼブルン」の名で呼ばれていたわけではない。

・14~16節は、「イザヤ書」8:23~9:1の引用。「イザヤ書」は、(上述のとおり)アッシリアの軍事侵攻を受けつつある北王国イスラエルの領域における破壊的現状を嘆きつつ、そこに残された希望を見出そうとする預言句として記されているが、「マタイ」は、その破壊的現状を嘆く表現を含ませずに、ただなお残されている希望を見出させる句として引用している。この時代、ガリラヤ地方は一貫してヘロデ王朝の支配下にあったが、「マタイ」は他の福音書と比較してもヘロデ王朝に批判的な考えを持っており(1~2章降誕物語を見よ)、主イエスがガリラヤから宣教を始められたことを、「ヘロデ王朝支配という暗闇の中に射し込んだ希望の光」として示そうとしているのかもしれない。

・「悔い改め」(メタノイア)の語義は「超越した精神」で、心理的な内観を意味する。新約では、「神への立ち帰り」の意で用いられている。

## 来週の誕生日(1月26日~2月1日)

## 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-355「主をほめよ わが心」(= I 76 歌詞)は、19-20世紀英国の医師ブリッジズの作詞とされているが、原詞は英語ジュネーブ詩編歌集に収められたウィリアム・キース作の詩編104のパラフレーズ。曲は、J.M.ハイドン。
- ・21-280「馬槽のなかに」(= I 121)は、20世紀日本を代表する讃美歌学者であった牧師・由木康の代表作。初期に、「イエスの神性はその人性のうちに包まれ、それを通して輝いている」との神学的確信を得たことに基づいて著した詩を、1931年版『讃美歌』で歌詞として採用。曲は、由木と同時代に東北学院、明治学院等で教鞭を執った教会音楽家・安部正義の作。
- ・21-412「昔、主イエスの」(= I 234)は、20世紀日本を代表する讃美歌学者で牧師の由木康が1931年版『讃美歌』編纂時に、社会的視点を持った讃美歌を補うために作詞。

## 21-355「主をほめよ わが心」

## My Soul, Praise the Lord!

1. My soul, praise the Lord! / O God, Thou art great: / In fathomless works / Thyself Thou dost hide. / Before Thy dark wisdom / And power uncreate, / Man's mind, that dare praise Thee, / In fear must abide.
2. This earth where we dwell, / That journeys in space, / With air as a robe / Thou wrappest around: / Her countries she turneth / To greet the sun's face, / Then plungeth to slumber / In darkness profound.
3. All seemeth so sure, / Yet nought doth remain: / Unending their change / Obeys Thy decree. / The valleys of ocean / Stand up a dry plain, / Thou wheldest the mountains / Beneath the deep sea.
4. The clouds gather rain / And melt o'er the land, / Then back to the sun / Are drawn by His shine: / Whereby the corn springeth / Through toil of man's hand, / And vineyards that gladden / His heart with good wine.
5. All beasts of the field / Rejoice in their life; / Among the tall trees / Are light birds on wing: / With strains of their music / The woodlands are rife; / They nest in thick branches / And welcome sweet spring.
6. Lo, there is Thy sea, / Whose bosom below / With creatures doth teem, / Scaled fishes and finned. / Above, the ships laden / With merchandise go, / Nor fear the wild waters, / Nor rage of rude wind.
7. O God, Thou art great! / No greatness I see, / Except Thee alone, / Thy praise to record. / On all Thy works musing / My pleasure shall be; / My joy shall be singing: / My soul, praise the Lord!